

『資本論を読む会』第7回目の案内！

【次回は】 2019年3月19日(火)午後6時から
会場:支局・社青同事務所

◎次回は第2章「交換過程」!!

※4月に「第1章・2章の総集編」読書会やります

2月22日(金)の「読む会」には、女性新人が初参加しました。選挙と春闘などで集まりにくい状態の中でしたが、今回も6名が集まりました。資本論のミソと言われる「第4節 商品の物神的性格とその秘密」を読み合わせてからレポート。そしてフリー討論。これで「第1章 商品」は終わり、次回は「第2章 交換過程」に入ります。

ただし選挙が終わってから「第1章と第2章の総集編」をやるという話になっています(4月の読む会で)。資本論の一番良いところですから、選挙などで参加できなかった人も入れて、できるだけ多くの人に参加できる日程を調整して「まとめの読書会」にしたいと思います。

今回のレポートと資料は、支局のホームページでご覧下さい。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」コーナーにあります。

レポーターから

○この節は、素直に読んでいくと本当に難しい。ということで、まず解説本から「要するに、マルクスは、ここで何を言おうとしていたのか」を理解してから本文を読むと…。

◎物神性…【解説】商品経済において、「社会的諸関係」が物として現れる転倒性をさす概念。商品の価値は人間の労働が対象化された労働生産物であるがゆえに付与されるものであるにもかかわらず、商品が本来物自身として有する自然的性質であるという幻想を生み出す。また貨幣は多種商品のうちの一商品が一般的等価物として貨幣商品に転化し、商品価値の一般的な表示、尺度をなすものにほかならないにもかかわらず、あたかも貨幣自身が価値の独立的存在であるかのごとく受取られる(ここは第2章で出てくる)。

さらに資本における物神性では、それが利潤や利子を生むことが、資本の自然的な性質によるものとされる。しかしこれらの転倒性は、物としての商品、貨幣や資本をいくら分析しても解明されず、資本主義的生産関係の科学的分析によって初めて明らかになるとされる。

○マルクス資本論のミソと言われるところだ。本文では

・129p 一つの商品は、…使用価値として見るかぎり…(また)属性は人間労働の生産物という観点…これに少しの神秘的なところもない。※机の例…しかし机が商品として現れると、感覚的にして超感覚的な物に転化する。

…机が踊り出す。※商品の神秘性はここから始まる

・131p 労働生産物が、商品形態をとるや否や生ずる、その謎に満ちた性質はどこから発生するのか?明らかにこの形態自身からである。

※商品形態は(人間に対して彼ら自身の)労働の社会的性格を労働生産物自身の(対象的性格として、これらの物の)社会的自然属性として、反映するという、したがってまた、総労働に対する生産者の社会的関係をも、彼らの外に存する対象(モノ)の社会的関係として、反映するということである。

「このとりちがえ」によって、労働生産物は商品となり、感覚的にして超感覚的な、または社会的なものとなるのである。

・132p 私はこれを物神礼拝と名づける。※フェティシズム、呪物崇拜

○「礼拝」についての論議…向坂は「礼拝」としているが、河出書房版では「崇拜」。レイトンは仏教ではライイ、なんて。134p「象形文字」どういう意味だ?!分からぬまま…。

○138p からのロビンソン物語は、世代のギャップがありそうです。年寄り世代はだいたい小学校の頃に読んでますが、「知らない」という方も…。(レポート anak)

DAS CAPITAL



☆参加希望の方は、できれば事前に、事務局または発起人にまでご連絡ください。

☆「これからの社会主義」掲示板<http://bbs6.sekkaku.net/bbs/socialisth.html>にも書き込みがあります。参考にしてください。

